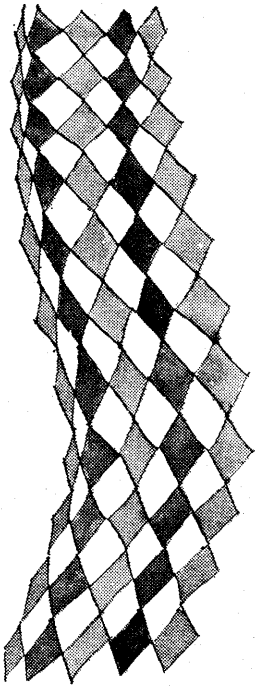
若いお母さんたちへ

幼稚園探しをめぐって

はるにれの会　榎田二三子



秋になり、お子さんの幼稚園を決められた方も多いと思います。我家の長女Aも、来年から二年保育で幼稚園へ入れることにしました。今までも地域の共同保育や大学の研究会へ参加していましたから、集団に入れることは、初めてではないわけです。ところが、親の私は、何か不安でしかたがありません。今までは集団に参加はしていても、泣けばすぐ聞こえる位の距離でした。幼稚園は、一日に何時間も親から見えない所にいるわけです。

友だちにいじめられて泣いても親の所へ来るわけにはいかないし、子どもはいったいどうするのだろうかとか、友だちと仲良く遊べるかしらとか、危ないことをやってないかしら、けがでもしなければいいけどとか、親の手の届かない所へ行かせる不安が次々にわいてきます。まるで風船の手を離す瞬間のような気持ちです。風船のように空高く上り、けっしてもどってこないわけではないのに。

この不安を少しでも少なくしたいと思い、安心してまかせられる幼稚園を探すことにしました。我家は八階建て、百三十九戸のマンション。一棟に同じ学年の子どもが十数人います。ですから、夏が終り秋になると、先輩お母さん、後輩お母さんが入り混じり、幼稚園についての井戸端会議が始まりました。そこでは、お母さんたちのいろいろな意見が聞かれました。私が思ったことも加えながら、御紹介しましょう。

○親も幼稚園に行くことが多いし、下の子がいたら、近くて送迎バスがあるのが何よりよというお母さん（雨の日や下の子が熱をだすことだってあるし、やっぱり近いのがいいかしら。）

○帰ってきても遊べるように、友だちが行っている所がいいわよというお母さん　（遊ぶ友だちがいなかったら淋しいでしょうね。でも今まで遊んでいたのだから、どうにかならないかしら。）

○子どもが、ここがいいというからと幼稚園を決めたお母さん　（子どもの言いなりでいいのかしら。親が幼稚園を決めるべきでないのかしら。）

○運動会の鼓笛隊を見にいらっしゃいよ。素晴らしくて、自分の子どもがやっているのを見ると涙が出ちゃうわよというお母さん　（幼稚園の子で鼓笛をできるのが、そんなに素晴らしいことかしら。やりたくない子はどうするの。他の大切なものを忘れちゃってんじゃないのかしら。）

○字や数を教えてくれるし、お話の読みとりなんかやってくれるから家で教えなくていいし、いいわよというお母さん　（みんな一斉にすわらせて字や数を教えられ、

子どもは楽しいのかしら。犬の調教みたいな気がするけど。お話だって、子どもと一緒にあれこれ話しながら読むのがいいんじゃないのかな。)

○字や数を教えないし、わりと自由らしいわよというお母さん　(実際に見学すると、個人を大切にし、自由を認める姿勢は感じられるけど、時間割が決められていて、今日はみんなでこれをやりましょうという園)

お母さんたちの話を聞いたり、幼稚園に見学に行ってあれこれ迷いました。見学に行った多くの幼稚園で、次のことを指示されるまで、ぼけーっとしている子、何もしないですわっている子がいるのに驚き、こういう幼稚園には入れたくないと思って帰ってくるのでした。ただひとつの幼稚園だけ、そういう子がいないと思った幼稚園がありました。以前この幼稚園のパンフレットを読み、子どもの自己充実を大切にしてくれていると感じていた幼稚園でした。けれども、華々しい幼稚園を見て、この幼稚園を見ると、日常生活と何も変わらないこの幼稚園が、一時は非常に見おとりして感じられました。他の幼稚園では、飛び箱が飛べるようになるとか、楽器ができるようになるとか、眼に見えることが子どもたちの身につけられていました。やらせればできるようになるのに、やらせないというのは、それだけ遅れをとり損をするのではないかと思えてきたのです。やらせればできるようになるのなら、そういう幼稚園もそれなりにいいのではないかと迷いました。けれどもやらせるなのです。子どもがやるではないのです。大事なポイントを見過ごすところでした。

私が幼稚園を決めるのに、これだけはどうしてもと思っていたポイントがひとつありました。我家のAは、家でも公園でも原っぱでも、紙くず、アイスの棒、花びら、落ち葉、石ころ等々、何でもすぐ見つけ拾ってきて遊び始めます。一旦遊び始めると、どんどん楽しみ始めひたっています。そしてまた新しく遊びを広げていく、生活を楽しむ子だと思っています。このことを親の私は、素晴しいことだと思い、このよい面をつぶさずに、伸び伸びと遊べるような時間と空間が保証された幼稚園

というのが、私の幼稚園選びのポイントでした。この点をとるためには、通園方法や、幼稚園の見ばえのよい設備などは、どうでもよいことだと思っていたのです。Aのためには、やはり自己充実を大切にしてくれるこの幼稚園しかないと思い始めました。

ところで、Aが生活の中で、どのようにして幼稚園というものを知ったのか、少しお話しておきたいと思います。Aは一歳三ヶ月で現在のマンションに引越してきました。たまたま、隣に五ヶ月早い同学年の女の子（N）と、年子のお兄ちゃん（R）がいました。三人は、兄弟のように行き来し、遊んでいました。大好きな隣のRが、幼稚園へ行き始めると、AはNと一緒にお迎えに行きます。制服を着て黄色いカバンをさげ、通園バスから降りてくるRは、Aのあこがれでした。Aにとって幼稚園といえば、Rの行っている幼稚園だけだったのです。次の年に、NもバスでRの幼稚園へ行き始めました。

Aに、どこの幼稚園へ行くのと聞けば、隣の子たちの行っている「こひつじ」と答えが返ってくるようになっていたのです。私が行かせたい幼稚園と、Aの行きたい幼稚園が違うわけで、どうにかしてこれを統合しなければなりませんでした。とにかく、私が行かせたいひかり幼稚園へ、Aを連れて見学に行ったわけです。小雨降る園庭で遊具をひっぱりだして遊び、ホールでは大きな積木で何やら作り始め、部屋にとことこと入って行き、そのクラスの子たちがへんな顔でちょっと見ているのも気づかず、本物のジャーから粘土のごはんを本物のおちゃわんに入れ、楽しそうでした。家に帰って聞いてみました。

「きのうの幼稚園と今日の幼稚園とどっちが楽しかった。」

「今のとこ。」（ひかり幼稚園のこと）

「今日のとこバスがないのよ。電車で行くのよ。」

「アキやだ。こひつじに行く。」

数日後、

「ひかりはいいよ。楽しいよ。」

「でも、アキはこひつじに行くの。」

その後も、

「この間行って楽しかったでしょ。ひかりに行く？」

こんなやりとりが、しばらく続きました。あまり「こひつじ」と言っているので、ある日お風呂の中で、

「幼稚園を決めるのは、アキじゃないからね。お母さんが決めるからね。」

と言い放ってしまいました。Aは私に背を向け、ぶすーとして何も言いませんでした。このしばらく後、近所の人にどこの幼稚園に行くのと聞かれると、ぶすーとして、「ひかり。」と、いかにも不本意そうに答えるようになっていました。これを見て、いけない、いけない、この子の心の中はまた「かなしい」なんだと気づかされました。

またというのは、今年の三月にAの「かなしい」という心に出会っていたからでした。それは、こんなできごとでした。夜寝る前にいつもの通りふとんの中で本を読み始めました。雑誌の乗り物や食べ物が並んでいるページを読んでいた時です。

「Aは何がほしいですか。」

「自転車。Nちゃんみたいなピンクの自転車。」

「へえ。黄色だっていいじゃない。」

「だってNちゃんにかっこわるいって言われると、アキかなしいもん。」

「他の人にいろいろ言われて、まねるのはいやだな。自分がこれがいいと思ったら、頑張ればいいじゃない。」

「だっていやなんだもん。Nちゃんと同じピンクがいいの。」

この時は、いつもならほしいものと聞くと食べ物をあげるのに、そのページに出ていない自転車と言ったことにちょっと驚き、隣のNちゃんの持っているものをまた欲しがり始めたと思っただけでした。けれども、子どもたちが寝静まってひとりになると、Aの言った「かなしい」という言葉が私の心の中にずっしり重く残り、本当に悲しくなってくるのでした。どうして私がこんな気持ちになるのか考えてみました。すると、友だちと遊んでいる時のAの様子が浮んでくるのです。

二歳の頃、Nとうまくいかず、Aが遊びを見つけ遊び始めると、Nちゃんにとられる。Aがまた新しく遊び始めると、またとられる。そしてもめる。Aはすぐ泣く。泣くとまたやられる。そんなことを繰り返すうちに、とられても泣かずに次の遊びを見つけるようになったA。

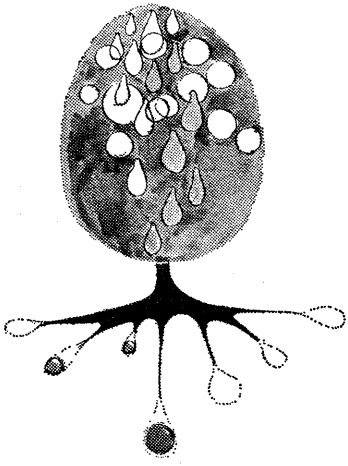
近所の仲よし四軒が集まって遊ぶと、「Aちゃんはだめ。」と言われてしめだされる。すると新しいことを見つけNちゃんに働きかけ、やがて入れてもらえる。けれども心の中は不発に終っているA。

いすを並べた電車ごっこで、「そこはだめ。」と言われると、それでも一緒にやりたいからだめと言われない隅の方にすわっているA。

おえかきをする時、紙をなかなかもらえなかったり、クレヨンも「ひとつだけね。」と言われ、机にも入れてもらえない。それでも一緒におえかきをしたいから、友だちのそばの床の隅でかいているA。

折り紙でアイスクリームを作ってみせると「へんなの。」と言われ、だまってしまうA。

はじかれたり、だめと言われたり、へんなのと言われたり、そんな中で黙々と自分なりにやっているAでした。自分の遊びをすることで、一応その場にはまる状況を作っていました。全体の動の中で、Aも動だったのですが、それは違う歯車であり、かみ合っていなかったのです。そこでのAの心は、「かなしい」だったのだろうと思いました。遊んでいるということで、私はAの心を



見過ごしていたのです。

今回も、私の気持ちの歯車と同じように回る歯車をAは作り、「ひかり」と答えることで一応母が満足いくような状況にしました。けれども、Aの心の中は「かなしい」のですから、歯車はかみ合っていないわけです。その上いかにも不服そうな仏頂面です。どうしたものかと思いました。ひかり幼稚園は遠いし、（我家から四十分かかります）友だちのたくさんいる幼稚園にしようかと、またまた迷いましたが、ひかり幼稚園がいかに楽しいか話すことにしました。ケーキを作ったり、ざりがにを採ったり、いちごつみをしたりするんだってと、Aの好きそうな楽しいことをたくさん話しました。そして、足繁く、幼稚園へ連れて行って遊ばせ、Aの気持ちを心の底から湧き上らせることにしたのです。ちょうど、幼稚園の行事があったので、それに参加することにしました。運動会では乳幼児のプログラムに出て園児の作ったケーキをもらい、バザーでは、お菓子を食べたり、買いものをしたり、お母さんたちの作ったシーツの宇宙船で遊んだりと楽しいことがたくさんありました。けれども何よりの決定打は、バザーのくじ引きで、欲しくて欲しくてしかたがなかったおもちゃのお金が何十コも入ったおさいふが当ったことでした。「これ、ひかりのバザーでもらったんだよね。」と言って友だちに見せています。ひかり幼稚園の楽しさが急速にAの心の中に入りこみ、「かなしい」はもうどこかへ飛んでいってしまったのでした。Aの行きたいと思う幼稚園と、私が行かせたいと思う幼稚園が、やっと一致しました。私の思う幼稚園へAを引っ張りこんだのではなくて、A自身の心がこの幼稚園を選んだように思え、うれしくなってくるのです。

Aが生まれて四年目の幼稚園探しでした。我家の場合は、Aにはっきりした希望があったことで、いったいこの子にはどんな幼稚園がよくて、どんな生活を作っていったらいいのか考えさせられました。要は、何をとり、何かを捨てるという決定をすればいいのだと思っていました。我家の場合は、気に入った幼稚園へ行くために通うたいへんさがあり、近所の友だちと遊べなくなるかも

知れないということでしたが、欲張って頑張ってみるとどうにかなるものです。友だちとどこかで接点を見つけようと気をつければ、子どもの世界は自然に広がっていきました。その下地作りをしているところです。こんな風に親が頑張り始めると、またAの希望が表われ、考えさせられることになるのでしょうが。

今日、幼稚園からの入園許可書が届きました。届いた許可書を台所で大声をだして読んでいますと、遊んでいたAが、

「えっ。えっ。」

とにこにこして言います。

「Aちゃん、ひかり幼稚園に来てください。待っていますだって。」

と言うと、

「わーい。わーい。うれしいな。」

と飛びまわっています。来年は、親子三人で幼稚園通いです。いったいどんな楽しいことが待っているのやら、Aだけでなく私も幼稚園に行く日が待ち遠しい気分です。

ところで、幼稚園探しを始める時に感じていた数々の不安は、よい幼稚園にめぐりあったからでしょうか、不思議なことにAの「かなしい」と一緒にどこかへ飛んでいったらしいのです。今では、いってらっしゃい風船ちゃん。幼稚園からもどってきたら、また楽しい話を聞かせてねと言って、何の不安もなく大空へAという風船を手離せるような気持ちになっているのです。